

〔徒然草〕^上唐の物は、藥の外はなくとも事かくまじ、書どもは此國におほくひろまりぬれば、かきもうつしてん、もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとりつみて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり、遠き物をたからとせずとも、又得がたき寶をたふとまずとも、文にも侍るとかや、

〔日本歳時記〕^四六^月刻み置たる藥種をも紙に包みながら、其口をひらき、日にあて、晒すべし、きざまざる藥は、其ま、日に干すべし、千金方には、く、藥をさいく、日に干すことなかれ、藥力うすくなる故なり、當時用ひざる藥は、烈日にはし、新瓦器に入、土にて口を封じ、用る時開き出して、急に又封すべし、年をふれども新しきがごとし、丸散の藥も、如此すべしとぞ、凡世の人、茶を壺に貯へよく保護すれども、藥をたもつ事をえらす、藥は尤人を養ひ病をいやす物なれば、貴重して收めたくはへ、氣味のぬげざるやうにして、性をたもつべし、口せばく、手の入ほどなる新瓶を多く作らせ、藥を入、わらをつかねて、口をよく封じ置くべし、如此すれば、久しく有ても、氣味うせず、是藥をたもつの良法なり、地黄、白芷、當歸、羌活、川芎、神麴、黃芪、甘草などは、時々晒ざれば、蟲くふ物なり、其餘は、えばく、さらす事なかれ、氣味うすくなるゆへなり、

〔皇國名醫傳後編〕^下福井楓亭

福井靦字大車、通稱柳介、^{一作立助}、^{號楓亭}、奈良人、幼有志操、師名醫菅隆伯、^中寛政初、幕府召至、江戸爲醫官、講靈樞於躋壽館、四年特命、^{内直}爲製藥所監、是年卒、初靦之創業、先召藥賈帛商、謂之曰、藥者醫療本根、人命之所關係、必擇上品者、第二品以下、謹勿持來、吾見其價賤、或生鄙心、用粗藥而不効、至誤人命、甚可畏也、若衣服反此矣、美麗者不許爾持來、華奢之成習、令人不覺、恐損吾宿志焉、

〔隨意錄〕^二明太祖嘗論兵曰、用兵猶用藥、藥能去疾、亦能致疾、苟無事而動兵、是猶妄以瞑眩之藥、強進無病之人、縱不殞身、亦損元氣、如今我清平之世、動兵之患、則無有焉、庸醫誤藥治、以損人身、則多有焉、